

発行日 2026. 3. 1
発行者 渡辺 真樹
発行所 一般社団法人
群馬県理学療法士協会事務局
群馬県前橋市大渡町 1-10-7
群馬県公社総合ビル 6F
源流題字 浅香 満
編集責任者 榊原 清



群馬県理学療法士協会ニュース

源流

No. 165 Contents

■第32回群馬県理学療法士学会を終えて（第2報）	02
学会長 坂本 敦	準備委員長 山崎 紳也	
■理学療法アラカルト	03
「急性期脳卒中理学療法における予後予測」	前橋赤十字病院 秋山 裕樹	
■書籍紹介 「セラピストのキャリアデザイン」	日高病院 大塚 勇輝 04
■職場紹介 デイリハセンターうちりハ伊勢崎境店	榎本 豊 05
■後輩理学療法士へ	石井病院 小林 大隼 06
■会員動向 ■ニュース收受 ■編集後記	07

第32回群馬県理学療法士学会開催が開催されました

(第2報)

「群馬県理学療法士学会を終えて

～学びという実りあるGPTA活動のために～

学会長 坂本 敦

準備委員長 山崎 紳也

第31回群馬県理学療法士学会の学会長・準備委員長から託されたバトンを、365日という歳月をかけて受け継ぎ、12月に第33回学会関係者へ無事に引き継ぐことができました。この一年を振り返ると、膨大な時間と重圧、充実感と疲労、思い出と混沌が入り混じった日々であったと感じています。引き継ぎ資料や備品を段ボールに詰め終えたとき、ようやく一区切りついたことを実感しました。

現在は本業の臨床に戻り、患者さんやスタッフと向き合う日常を過ごしています。安堵感に包まれる一方で、かすかな寂しさも芽生えてきました。それだけ本学会が、自分にとって大きな意味を持つ経験であったのだと思います。

学会運営を通して、参加者として関わってきたこれまでとは全く異なる視点を得ることができました。参加者が安心して聴講・発表できる環境は、数えきれない準備と細やかな配慮の積み重ねによって成り立っていることを、身をもって知りました。まさに水族館のバックヤードを見学したような感覚でした。

多くの関係者と日々連絡を取り合う中で、言葉の選び方や伝え方の難しさ、そして重要性を学びました。丁寧なやり取りこそが、円滑な学会運営を支えていることを実感しています。事務局の皆様には、膨大な実務を通して多方面から支えていただきました。また、当院スタッフならびに当日の運営に協力して下さった北毛ブロックの会員の皆様のおかげで、本学会を無事に終えることはできませんでした。日常業務と準備を両立できたことは、チームワークの強さを再認識する機会にもなりました。

SNSやICTツールの活用、高校生・養成校学生の参加・発表、著名な先生方をお招きして温泉地で開催できたことは、本学会に活気と特色をもたらしました。また、多くの企業・団体の皆様から協賛・出展のご協力を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。

至らぬ点多々ありましたが、この経験は準備委員一同にとって大きな自信となりました。本学会準備に携われたことに、改めて深く感謝申し上げます。



理学療法アラカルト

「急性期脳卒中理学療法における予後予測」

前橋赤十字病院 秋山 裕樹

急性期脳卒中理学療法においては、リハビリプログラムは脳卒中の病態、個別の機能障害、ADL 障害、社会生活上の制限などの評価およびその予後予測に基づいて計画することが勧められるとされています¹⁾。予後予測やゴール設定については私も日々悩みますし、若手の方々であればなおさらであると思います。今回は歩行自立度、下肢運動機能に関する予後予測研究を簡単にご紹介いたします。

まずは TWIST (Time to Walk Independently after Stroke) Tool²⁾です。こちらは 2017 年に作成され、update されたものが 2022 年に発表されています。評価項目は発症 1 週時点での年齢(80 歳以上/未満)、膝伸展筋力 (Medical Research Council : 3 以上/未満)、姿勢制御 (BBS : 0-6/6-15/16-) からスコアリングされ、最小 0、最大 4 点で評価されます。たとえばスコアが 3 点の場合は、発症 4 週で歩行自立する確立が 43%、6 週では 81%、9 週では 95%、、、という感じになります。

つづいては下肢 Fugel-Meyer Assessment を用いた比例回復ルール³⁾です。初期評価時(発症 72 時間後)の下肢 FMA から 6 ヶ月後の下肢機能を予測するものです。上肢版が先に開発されていますが、初期下肢 FMA が 14 点以上の場合に上肢同様の比例回復ルールに従い、最大予測回復値の最大 64%分の回復が見込める、というものです。初期下肢 FMA が 25 点だった場合、 $(34-25) \times 0.64 + 25 = 30$ 点程度への回復が予測されます。しかし初期下肢 FMA が 13 点以下の場合には適合しないと言われていました。

このように臨床場面で使いやすいそうですが、実際に使用するには注意が必要です。予後予測モデルには開発、検証(内的・外的)、インパクト評価の 3step がありますが、外的検証されているものがまだ少ないという現状があります。また使用の際には目の前の患者さんに適応できるか?という点が大切ですが、その研究の対象の年齢層や疾患の重症度、発症時期、アウトカム測定などの視点から吟味が必要です。臨床推論における情報の一つとして捉え、その他評価結果と合わせ他職種と相談しながら総合的にゴール設定をしていく形が良いと思います(結果の伝え方については必ず所属施設のルールに従ってください)。

参考文献：

- 1) 日本脳卒中学会 脳卒中ガイドライン委員会：脳卒中治療ガイドライン 2021。協和企画，東京，2021
- 2) Smith MC, et al : The TWIST tool predicts when patients will recover independent walking after stroke : an observational study .Neurorepair Neural Repair 36 : 461-471, 2022
PMID: 35586876
- 3) Verbeek JM, et al : Is the proportional recovery rule applicable to the lower limb after a first-ever ischemic stroke? Plops One 13 : e0189279, 2018
PMID: 29329286

*****書籍紹介*****



セラピストのキャリアデザイン

日高病院 大塚 勇輝

著者名：元廣惇
出版社：三輪書店
価 格：¥2,800 円



初めまして。日高病院の回復期病棟に勤務している理学療法士の大塚と申します。今回、私の方からは「セラピストのキャリアデザイン」という書籍をご紹介します。

私は理学療法士として回復期病棟に勤務してきた中で、これまで多くの患者さんと関わり、学び、悩みながら歩んできました。そんなある日、先輩からふと「興味ある分野は？」と問われ、すぐに答えられなかった自分に気づきました。「自分はどんなセラピストになりたいのだろうか？」新人の頃は目の前の業務に必死で、経験を重ねるにつれて役割や期待も増えていきます。その中で、いつの間にか自分のキャリアについて考える時間が後回しになってはいないでしょうか。

理学療法士として働く中で、「このままでいいのだろうか」「自分の強みは何だろう」そんな不安や迷いを抱えることは珍しいことではないと思います。

本書は、その悩みを否定するのではなく、自分自身の価値観からキャリアを見つめ直す視点を丁寧に示してくれる一冊です。著者は、キャリアとは誰かに与えられるものではなく、「自分がどうありたいか」から逆算して設計するものだとして述べています。資格や役職といった〈外側の目標〉よりも、「どんなセラピストでありたいか」「どんな人生を送りたいか」といった〈内的キャリア〉に目を向けることで、自分らしい働き方が自然と見えてくるような視点が大きな特徴です。

また、キャリアは積み重ねではなく〈編集できる〉という考え方も印象的でした。臨床経験、勉強、出会い、悩み、転職、家庭、趣味など、点在しているように見える経験も、見方を変えれば全てが強みになります。これまでの道のりを再編集することで「自分は何者なのか」「これからどんな方向に進みたいのか」が整理されていきます。正直に言うと、私はこの本にもっと早く出会いたかったと感じました。同時に、今だからこそ腑に落ちる内容も多くありました。だからこそ本書は、これから歩み始める方にも、今まさに立ち止まっている方にも、そして次のステージを考えている方にもそれぞれのタイミングでヒントを与えてくれる一冊だと思います。

キャリアに迷うことは、決して弱さではありません。それはより良い働きを求めている成長のサインです。

もし今、キャリアについて悩んでいるならその悩みごと本書に預けてみてはいかがでしょうか。きっと、皆さんらしい働き方を見つけるヒントに出会えるはずです。



職場紹介

株式会社和一 デイリハセンターうちりハ 伊勢崎境店

榎本 豊

うちりハ伊勢崎境店は、2022年に群馬県伊勢崎市に開設されたリハビリ特化型のデイサービスです。当事業所は、運営会社である株式会社和一が深谷・熊谷エリアで10年かけて培ったノウハウを詰め込んだ、群馬県内での第1号店となります。「人々の健康と自立を支援する」という企業理念のもと、地域の皆様が住み慣れたご自宅で長く安心して生活し続けられるよう、在宅生活のインフラを支える拠点として事業を推進しています。

我々の周辺地域でも高齢化に伴い、単なる運動不足解消だけでなく、より専門的で効果の高いリハビリへのニーズが高まっていると感じています。特に退院後のリハビリ継続や、日常生活での具体的な動作改善を求める声が多く、そのような期待に応えるため、当事業所では経験豊富な理学療法士（PT）を配置した体制を整えています。身体機能の維持・向上はもちろんのこと、一人ひとりの「生活課題の解決」に焦点を当て、ご本人やご家族が抱える不安を軽減できるよう取り組んでいます。

実際のところ、デイサービスという領域で理学療法士が真に価値を発揮するためには、単に訓練を提供するだけでなく、ご利用者様の生活背景に寄り添ったコミュニケーションが不可欠です。当店舗では、レッドコード（天井から吊るした赤いロープ）を用いた安全な運動や、スタンディングエクササイズなど、質の高いプログラムを組み合わせながら、理学療法士が個々の状態に合わせた個別リハビリを提供しています。こうした専門職の関わりが、ご利用者様の「また歩けるようになった」「家事が楽になった」という喜び、ひいてはご家族の介護負担軽減に直結すると確信しています。

ところで、当事業所を運営する株式会社和一には、スタッフの成長と働きやすさを大切にする文化があります。「職員が仕事を通して夢や目標を実現できる環境づくり」を方針として掲げており、これは代表である真下のリハビリテーションに対する熱い想いに基づいています。スタッフ一人ひとりが学びを楽しみ、素直に課題に向き合える環境があるからこそ、ご利用者様に対しても「期待を超えるサービス」を提供できると考えています。ワークライフバランスにおいても、スタッフが安心して成長し続けられるよう、お互いの長所を伸ばし合えるチーム体制の構築を意識しています。質の高いサービス提供を追求することで、スタッフの負担軽減と自己研鑽の時間を両立させています。こうした職場環境の充実が、結果としてサービスの質に還元され、事業所とご利用者様の双方に利益をもたらす好循環を生んでいます。

引き続き伊勢崎市の在宅生活を支える存在として、地域社会から必要とされる「居場所」となれるよう、スタッフ一丸となってさらなるサービスの向上に努めてまいります。



後輩理学療法士へ

医療法人石井会 石井病院

小林 大隼



皆さん、はじめまして。私は伊勢崎市にある石井会石井病院で理学療法士として勤務している小林大隼と申します。当院のリハビリ課では、一般急性期病棟、回復期リハビリテーション病棟、地域包括ケア病棟の患者様を対象にリハビリテーションを提供しています。私は一般急性期病棟と回復期病棟での経験があり、5年が経ちました。

患者様へリハビリテーションを提供するにあたり、患者様からはしばしば「元の生活に戻りたい」というHOPEを伺います。この言葉を聞くたびに、提供するリハビリテーションの目標と成果について深く考えさせられます。多くの患者様が自宅へ退院されますが、中には再入院された方やADL低下により施設入所となる方もいらっしゃいます。これらの経験から、私は自分自身の評価や治療が患者様にとって最適だったのか、時に疑問を感じることもあり、自信が持てないこともありました。

「元の生活」という言葉には、どのような意味が込められているのでしょうか？私がリハビリテーションに従事して間もない頃は、自宅退院に向けて身体機能を基に動作獲得を目標としてリハビリテーションを実施していました。退院時にはFIMスコアが向上していることが多く、病前の生活に戻れると考えていました。しかし、実際には患者様が望む「元の生活」までには戻れないことがありました。振り返ってみると入院中の身体機能やADL能力は定量的評価を用いて数値化していましたが、病前生活の評価として定量的評価を用いることが少なく、「元の生活」へのアセスメントが不十分であったと感じます。

現在は、患者様の「元の生活」をより詳細に把握するためにFrenchie Activities IndexやLife Space Assessment、QOL評価としてEQ-5Dなどの評価バッテリーを用いて「元の生活」を可視化しています。病前生活を定量評価に置き換えて情報収集を行うことで、「元の生活」がよりイメージしやすくなり、リハビリテーションのNeed設定を具体的に設定出来るようになりました。もちろん定量評価に偏らず、患者様の生活歴、趣味嗜好や人生観、環境因子なども定量評価と同じくらい大切だと考えています。

このような視点の変化は、症例報告のフィードバックを通じて先輩からアドバイスを受けたことがきっかけでした。症例報告は苦手意識を持つこともありますが、自分が見落としていた点や新たな視点の発見など、意見をいただくことで臨床能力や推論、退院コーディネート能力などの成長につながると感じています。みなさんも自分の成長のため、そして何より患者様のために、日々の努力を惜しまず一緒に成長していきましょう。

会員動向

令和8年2月25日現在

会員数 2,481名 在会会員数 2,037名 休会者数 444名 施設数 426施設

ニュース收受

2025/11/17	群馬県言語聴覚士会ニュース 80号	群馬県言語聴覚士会
2025/11/17	年報第45号	群馬県スポーツ協会
2025/11/19	ぐんま作業療法研究	群馬県作業療法士会
2025/11/21	年報ひたちの	茨城県理学療法士会
2025/11/28	群馬県医師会報 No.928	群馬県医師会
2025/12/5	兵庫県理学療法士会 士会だより No.208	兵庫県理学療法士会
2025/12/11	群難連 新刊 95号	群馬県難病団体連絡協議会
2026/1/5	IPTA インフォメーション No.190	茨城県理学療法士会
2026/1/5	和歌山県理学療法士協会ニュース No.106	和歌山県理学療法士協会
2026/1/5	北海道理学療法士会誌 Vol.42	北海道理学療法士会
2026/1/5	群馬県医師会報 No.929	群馬県医師会
2026/1/5	JPTA NEWS No.358	日本理学療法士協会
2026/1/5	大阪府理学療法士会ニュース配信第313号	大阪府理学療法士会
2026/1/19	理学療法兵庫 No.31	兵庫県理学療法士会
2026/1/20	ケアマネ群馬 No.140	群馬県介護支援専門員協会
2026/1/20	会報 群臨技 491号	群馬県臨床検査技師会
2026/1/22	秋田県理学療法士会ニュース 第219号	秋田県理学療法士会
2026/1/29	群馬県医師会報 No.930	群馬県医師会
2026/1/29	群馬県作業療法士協会ニュース「からっ風通信」第163号	群馬県作業療法士会
2026/2/10	HPTA NEWS One step No.284	広島県理学療法士協会

編集後記

今回、初めて源流の編集に携わらせていただきました。源流の編集に際して、原稿依頼を快く引き受けてくださった先生方、心より御礼申し上げます。

2026年になり、寒い日が続いておりますので、みなさま体調に気をつけてお過ごしください。

木村 善英